

平成18年度 第2回帯広市総合計画策定審議会 議事概要

1. 日 時 平成18年7月21日(金) 10:00~12:00
2. 場 所 市本庁舎10階第5A会議室
3. 概 要 次期総合計画の策定準備に向けて、下記のとおり講演会を開催しました。

講師 高崎経済大学 地域政策学部 佐藤 徹 助教授

演題 『これからの総合計画の役割と課題 - 市民との協働の視点から - 』

質問・意見の概要

【委員】「市民」という言葉を考えると、そこに住んでいる人や、国民、道民、市町村民など行政範囲のなかでの市民などいろいろな捉え方があると思うが、どのように考えているか。

【講師】市民と住民と対比すると、一般的には、住民は地域や団体の利益やエゴなどネガティブな使われ方をされる。市民は前向きで自立したイメージとして使う人もいる。個人的には、そうした色分けをして考えていない。行政体による色分けも考えていない。市民はそこに住んでいる人でもなく、一般論として、市民は、住民や通勤・通学者など住民よりも広く捉えている。東京の豊島区では、NPOなど活動者も市民に入れている。

【委員】A市の事例では、未来会議などの任意の組織がインセンティブをもってまちづくりに参加するが、結果をどう行政につなげているのかが重要な点だと思う。B市の場合は、どうか。また、総合計画のテーマ別の策定作業に参加した行政職員はどういったメンバーか。

【講師】まだ、いま検討しているところ。A市は年3回の市民との大会を行い、変更・改善の場やしきみをつくっている。B市は、しきみがまだできていなく、財政的に厳しいこともあり、中長期的な課題には対応できていない。A市の場合もまだ完成されたものでなく、これからも成長していくシステムで固定化したものではない。ある程度実験的にすすめ、改善していく姿勢が必要。その意味では見切り発車的なところも必要。市の担当者は市民主導の方法を考えているところと聞いている。

個別テーマに関わる職員のレベルは、若手では対応しきれない面があり、一定の権限もありネットワークの軽い課長レベルに入ってもらった。

【委員】総合計画は策定したら終わり、もう変えない、といった面がある。民間ではPDCAサイクルのなかでも、特にC（評価）のところが一番に気になるところ。10年一昔はいまでは1年一昔の時代。審議会もそうだが、森を見れず、枝葉末節な論議にもなる。論議する時間もあまりないなかで、PDCAサイクルをうまく回すためには、われわれもどうやったら森も見れて、審議会も統一してやれるのかが大きな課題だと思う。

【講師】PDCAサイクルには、マクロのものと個々の事業の2種類ある。事業は担当者や係のなかでのPDCAで、もう一つは総合計画などの大きなPDCAがある。帯広市の事務事業はボトムスの点検であり、ミクロのマネジメント。総合計画・後期推進計画の成果指標は大きなマクロのもの。だが、市民参加がなくつくられたものという側面がある。こうした成果指標はつくっているところは少なく、また公表しても市民の反応がないのが通常。評価システムとして形はできるが、使われていない実態がある。道具を磨き、だれが、どう使うのかが重要になるが、B市も現在考え中。A市の事例は一つのモデルだが、それがベストかどうかはまた別問題。

【委員】外部評価については、コンセンサスを得るには非常に時間がかかるなかで、どういう形がいいのか。

【講師】一概にはいえない。外部評価は行政の相当の負担が伴う。C市では外部委員会をもっているが、総合計画の審議会が計画策定後にモデルチェンジしたもの。はじめは、ひとつひとつの評価をしていたが、もっと大局的に見てもらおうと、まちづくり指標をつくってすすめているが、重箱の隅をつつくような議論になり、苦労しているという。あるべき姿としては、あった方がいいが、すべてをやろうとすると業務量としては耐えられない。あるいは、オンブズマン的になってしまうと、本来主旨と違ってくる。森も木も見れるといいが、どこから入っていくかが問題。外部委員会を設け、協働型評価をしていく、逆に協働型評価をすすめ、そこから外部委員会として形をつくるなど、各地域にあったやり方を判断して設計していくべき。

以上。